

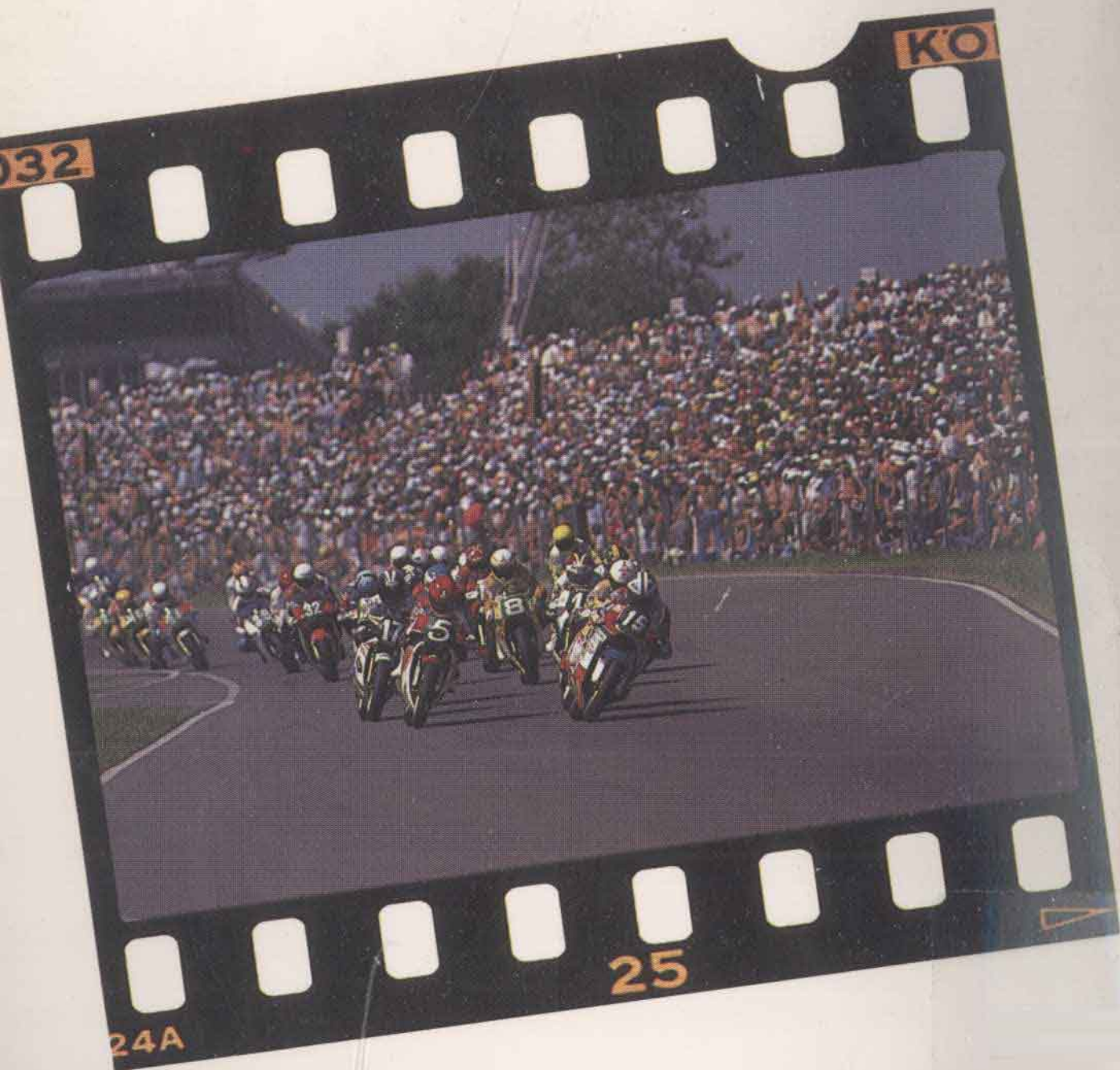
ウインディーII

Windy II

—Continental Circus—

Yuji Izumi

泉 優二



ワインディー II

いづみ ゆうじ
泉 優二



角川文庫 6507

昭和六十一年九月十日 初版発行

発行者——角川春樹

発行所——株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二—十三—三

編集部(〇三)二三八—八四五—

電話 営業部(〇三)二三八—八五二—

千一〇二 振替東京③一九五二〇八

印刷所——暁印刷 製本所——本間製本

装幀者——杉浦康平

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

Printed in Japan

ウインディーⅡ

Continental Circus

泉優二



角川文庫 6507

目次

1	Masina & Sam	五
2	Vacance	六七
3	Farewell	八五
4	Separation	一四三
5	Meet Again	一六六
6	Continental Circus	一七九
7	KEI SUGIMOTO	二三一

あとがき	二五九
レースという人生	二六一
現代の戦士たち	二六四
用語解説	二六七

イラスト 佐原 輝夫

1 Masina & Sam

ヘルムントの颯爽たるライディングがドーバーに向かうモーター・ウェイの前方にみとめられた。

敬とアンナは無言のまま沈みはじめた太陽を右側から受けながら南へ走り続けている。

バージニオの車がバックミラーに映っている。

アンナはアポロ・キャップを右にずらして斜光をさえぎっていた。トラックのフル・スロットルのエンジン音だけが周期的なうなりを、耳鳴りのように感じさせながら、運転席を支配していた。

敬はまるで頭を空っぽにして、フロント・ガラスから見えるモーター・ウェイを漠然と眼に映していた。

突然右手の方でフォーンがけたたましく鳴った。

敬は左レーンを走り続けていた。

フォーンが再び鳴った。

アンナが敬の肩をつついた。

「変な女が手をふってるわよ！」

「なんだって」敬は右ドアの窓から横を見た。

M・Gの真っ赤なオープン・カーが走っている。左側の助手席にデニーズが座っていた。彼女が何か叫んでいる。アンナはトラックの窓を開けた。急激に百二十キロで走っていることを実感させるだけの風と騒音が運転席に舞い込んだ。

「ケイ!! お先に!!」デニーズの声がとぎれとぎれに聞こえた。サングラスをかけ隣で運転している男の顔がこちらを向いた。カーターだ。

薄ら笑いを浮かべてポンコツ・トラックを眺めまわしている。

「強気だけじゃレースは勝てないぜ! 気をつけるこったね、命が幾つあっても足りないかな」カーターはトラックの窓に向かってどなった。

「なに言ってるのよ、青二才が! あんたの横にいる厚化粧の女をよく見てみたらいいわ。

笑われるのはあんたの方よ!」アンナは窓から身を乗り出すと手を振りあげてM・Gを追っばらう仕草をした。

デニーズは彼女が一番お気に入りの方の笑いであるルージュの口紅の間からきれいにそろった歯を目いっぱい光らせて、首をかしげた。

「また逢いましょうね、ケイ!!」デニーズが言った。

「ケイ!! その乱暴なレディ、の尻に敷かれないうちに気をつけろよ!」カーターも続けた。フォーンを短く鳴らすとM・Gは視界の中心へ点となって消えた。

「なによ! あの人たち、一体何が言いたかったのかしら」アンナは敬を見た。

「俺をからかってるのさ」

「からかってる……」

「そうだ。俺はあいつに勝つ以外にないのさ、ミッシェルと同じだ」

「そうだったら、わたし、くやしいな!」

「負けているうちは何も言えないさ」敬は平然とそして低い声で言った。

ドーバーへ向かうモーター・ウェイから、少し入ると、小さな河岸にキャンプ・サイドがある。敬、バージニオ、そしてヘルムントは、そこに泊まることにした。

アンナの発案で、日本風のスキヤキを本日のディナーのメイン・ディッシュにしようということになり、バージニオもヘルムントも大賛成した。敬だけが渋い顔をしている。アンナはそんなことには、おかまいなしにスーパーへ買い物に出かけようとしていた。アンナはドニントン・パークでレースが終わった後の元気のなさなど、けろっと忘れてしまったように元気がいい。

「アンナ! 勝手にスキヤキ・パーティーなんてこと言い出すなよ!」敬が言う。

「悪いアイデアじゃないでしょ。だいいちいいシェフがいるじゃない！」

「ちょっと待て……」

「そうよケイ、ジャパニーズは、あなただけでしょ。憂さばらしでもしなきゃ！ ケイの顔みてるよ、どうにかなってしまいそうだから」

「レースで疲れてるんだ。俺は寝るぞ」

「どうぞ自由に、みんなが期待しているのにあなたは平気でそれを裏切れるのね」

「……………」

アンナはさっさとスーパー・マーケットの方へ歩きはじめた。

「マーケットまでは一キロ近くあるぞ!!」敬がどなっても振り返りもしない。

スーパー・マーケットで野菜と密封パッケージに入ったトウフを買おうとアンナは肉屋に向かった。

肉屋はスーパー・マーケットから五十メートルほど東、キャンプ場寄りの街はずれにあった。店の外側は木枠で作られたショー・ウィンドーがあり、そこにハムやソーセージが斜めに外向かって置いてある。客はだれもいない。

「ハロー！ ビーフの肉を見せてくれる？」アンナははずんだ声をあげた。

店の主人が何種類かの肉を冷蔵庫から取り出した。

アンナは三種類の肉をカウンターで検討して柔らかそうな、日本でいう「霜降り」的な肉を

選んだ。主人は不思議そうに彼女の選択を見ている。

「おじさんはスキヤキって知ってる？」アンナは計量をしている主人に言った。

「知らないね」ぶっきらぼうに彼は答えた。

「あのね、その肉すごく薄く切ってもらいたい、すごくよ。肉を通して反対側がすけて見えるくらいにね。ステーキみたいに厚かったら絶対だめよ！ スキヤキ用だからね」アンナは心配気な表情を浮かべた。

「そんなに薄くは切れないな。それにうまくないな、そんなことしたら肉は！」

「いいの、わたしの言うことを聞いてくれれば。どこの肉屋さんでもこのことで苦勞するのよ。ママだったら自分で作れちゃうんだけどな……」

「分かったよ、とにかく薄くだね。こんな注文初めてだよ。だいいちスキヤキってなんだろう」主人がめんどくさそうに言う。

「ジャボン料理よ」

「奇妙な料理だな！」主人は肉を切りはじめた。

「ちがう、もっと、もっと薄く切ってと言ってるのに！」アンナはあきらめ顔でつぶやいた。肉屋から外に出るともうダーク・ブルーの世界が地上のほとんどをおおっていた。

商店の明かりと数少ない街灯が石畳を照明しているにすぎない。

アンナはスーパーで買い込んだものを入れた段ボール箱に、肉をつめこんだ。彼女は溜息を

つくと小さな肩にそれをのせた。

「あら重そうな荷物ね、持てるのかしら？」

アンナが声のする方を見ると女が立っていた。彼女は真っ赤なレザーナギを着ていた。ショート・カットされたヘアー、顔が小さく眼鼻立ちも小づくりでチャーミングだ。髪は金髪というよりシルバーに近く、それは商店のウィンドーから流れ出るライトに映えて輝いている。アンナは彼女のプロポーションに見とれていた。

「どうしたの、私にどこかおかしいところがあるのかしら？」女は微笑みを絶やさずに話しかけた。

「完璧だわ！」アンナは言った。

女はアンナがいままで聞いたこともないような楽しげな声で笑った。

体全体は、エレガントというだけでなく、優しくありながらしかもシャープで、スポーティな感じがする。

「あなた車で来たの？」女が言う。

「ちがうわ、歩きよ」

「近所の子なの？」

「旅の人間よ」

女はまた笑った。

「私もよ」アンナも笑い返した。彼女の顔を見ていると不思議に抵抗する気持ちが湧いてこない。

「どこまでその荷物を運ぶのかしら？」

「キャンプ場よ」

女は道の反対側に置いているドウカティの方を指さした。

「私もよ、一緒に行きましょう。道が分からなくて店の人にでも聞こうと思ってたの」

二人はドウカティの方へ歩き始めた。900 SSのスペシャル・バイクだ。フレームは赤で塗ってあり、しかも市販のものより太いパイプだ。シートも随分と低くなっている。

アンナは品定めをするようにバイクをひと回りした。

「気に入ってくれた？」

「うん、このフレームは見たことないわ」

「随分と詳しそうだわね。フレームはスイス製なのよ」

「スイス!?」

アンナは段ボール箱を、よく磨かれたタンクの上に載せた。女はバイクにまたがると慣れた動作でキック・アームに体重をかけた。市販のドウカティより音が太く重く、そして、はじけるようなエキゾースト・ノートだ。

アンナは改造されて、小さくなっているリア・シートに座った。女はアンナに自分の赤いキウイのフルフェース・ヘルメットをかぶせた。

「名前も聞いてなかったわね」女は言った。

「アンナ！ アンナ・スギモト」

「スギモト？」

「そう。パパはレーシング・ライダーで日本人なの」

「あなたのパパのレースを見てきたばかりなのよ」

女はゆっくりクラッチをミートした。エキゾースト・ノートは後輪にトルクを伝えるためかのように、力強さを増した。グイッとLツイン・エンジンは、二人を風と鼓動の世界へ運び込んだ。

「私の名は、マシーナ。スイス人、ローザンヌの近くに住んでるの」

クリップ・オンのハンドルに軽く手をそえて前傾した姿勢のマシーナにアンナはしがみついていた。女性の柔らかさを腕と胸に感じながらアンナは、久しぶりの肌の温もりに心地よさをおぼえていた。

「わたしたちスキヤキ・パーティーを開くの。あなたも来てよ」アンナが言った。

「乱暴な言い方ね、それご招待？」マシーナは左手をはなしてアンナの方へ頭をまげた。シート・カットされた髪が騒がしそくに波打った。

「正式にご招待いたします」気持ちよく快活にアンナは言った。

「お氣遣いありがとうございます。充分楽しませていただきます」二人は笑った。

キャンプ場の中へ入ると、マシーナはミッションをロー・ギアまで落として、アイドリ
ングしている時のような状態でバイクを走らせた。それでもかなりの音が周囲にふりまかれた。
キャンプ場の一番奥の川べりにキャンプ・ファイアーが見えた。

キャンプ・ファイアーのそばまで来ると、アンナはドウカティからとび降りた。

マシーナはミッションをロー・ギアに入れたままイグニッションを切るとサイドスタンドを
立てた。

アンナは敬に走り寄った。

マシーナは段ボール箱をかかえて、焚き火の方へやって来る。

「ケイ！ マシーナをスキヤキ・パーティーに招待したの」

「マシーナ？」

「わたしを送って来てくれたの」

「見れば分かるさ！」

敬はそう言うのと焚き火の上に用意してあるフライパンに油を引いた。

マシーナは敬の後ろに立つと段ボール箱で敬の背中を押した。敬がふりかえった。

「私、マシーナです。アンナと友人になったの。迷惑じゃなかったかしら？」

敬は彼女の眼から視線をそらせて、箱を受け取った。

「……………」

「ぜひ、あなたのスキヤキを作るところを見せていただきたいわ」

敬はフライパンに無造作に肉をほうり込んだ。

アンナがマシーナに近寄ると腕を引っぱった。

「マシーナ！ ケイが少し不機嫌にみえるのは気にしないでね。あなたのこと出ていけって言わないだからいいのよ、ここにいて」

「少し不機嫌どころか上機嫌に見えるわよ」二人は声をかみ殺して笑った。

「みんなを紹介するわ」

アンナはまずヘルムントを紹介した。童話の話も付け加えた。そしてバージニオ一家、特にリカルドについて時間をさいた。

ヘルムントはBMWのサイド・カーの中から大切に包んで保管していたモーゼル・ワインを出して来た。

あたりにスキヤキの匂いが充満した。

「ヘルムントからどうぞ」ケイが小皿にスキヤキを盛りつけた。続いてアンナが全員の盛り付けをはじめた。

「いい香りだ。ソイ・ソースの味といい、神戸肉のようだな」ヘルムントが言う。

「薄い肉^{うすく}っていうのもなかなかだな。この味付けはイタリアからアジアに渡^{わた}ったものだな」満足げにバージニオが言った。

「神戸肉^{ゴッポ}って何？」アンナがヘルムントに問いかけた。

「ビールを飲まされて、からだじゅうマッサージされ、人間の口に入るのを待っている牛たちのことさ」

「牛にビールを!! 知らなかったわ、ケイ知ってた?」

「知らんな」

「ケイも知らないってさ」アンナが言う。

「悪い一生じゃないようだな」バージニオが言った。

「人間にたとえても?」マシーナが口をはさんだ。「矛盾^{むじゆん}してると思うわ、牛は明らかに人間に食べられるために飼育^{しいう}されて来たわよね。そして無理矢理^{むりやり}ビールを飲まされて眼^めを白黒させながら足元をふらふらさせるわけよ。社会と個人の関係にも同じようなことあるでしょ、良いか悪いか牛に聞いてみたいわ」

「そうじゃな、あまりいい話題ではなかった」ヘルムントはうなずいた。

ケイは黙々^{もくもく}とスキヤキを口に運んだ。

「どうでもいいことさ、俺^{おれ}たちは毎日肉を食べているんだ」敬がつぶやいた。

「ワインで乾杯^{かんぱい}しようよ」アンナが大きな声で言った。